

五十嵐ゆうこの米國小売業最新レポート

2021年7月30日

The Labor Shortage

(雇用不足)

現在、経済を再開した米国で外食やサービス業を中心としたホスピタリティ業界の雇用不足が深刻です。

先週末に発刊された The Business Insider 誌において、数十万件の募集広告を打ち出しているにもかかわらず、スタッフの確保に至っていない調査報告をしていました。

例えば、レストランの4か所のうち3か所でスタッフ不足に苦慮し、特に独立系レストラン・オーナーの74%がパンデミック前よりもスタッフを確保することが困難になったと述べています。

また、調査では中小企業のオーナーの44%はパンデミック前よりもスタッフに多くの賃金を支払っていると述べています。

更に賃金の高騰だけでなく、インフレで仕入れコストに影響が出ています。中小企業のオーナーの5人のうち4人は仕入れコストが上昇したと指摘し、全体の約40%以上のオーナーが人件費と仕入れコストを合わせると25%以上も負担割合が増加したと報告しています。



また同紙では、メイン州にある Brady's というレストランのオーナーは材料を仕入れているサプライヤーから “スタッフ不足と仕入れコスト上昇で十分なハンバーガーパーティを納品出来ない” と突然言われ、レストランの営業時間を短縮せざるを得なかったことも取り上げています。

人件費と仕入れコストの上昇はホスピタリティ産業に大きなダメージを与え、一部のレストランでは十分なスタッフを確保できない為、やむを得ず定休日を追加する事態にも至っています。

同紙のアナリストは、ビッグチェーンは自社価格を引き上げて商品やスタッフの高額な負担を回避できますが、中小企業は大幅な価格変更を行うことに対して消極的なので更に経営状況を逼迫させていると分析しています。

同時に行った調査では、ホスピタリティ業界で以前従事していたスタッフの3分の1は、より高賃金、より整った福利厚生、より良い職場環境の確約が無ければ同じ職場に戻らないと回答しているそうです。

直近のデータではホスピタリティ業界での平均賃金は上昇し続け、例えば2021年5月は1時間あたり平均15.84ドルでしたが、6月では平均16.21ドルに跳ね上がりました。



通常、これほど賃金が上昇するまでには、およそ1年間かかるそうです。

そして雇用の契約サインをした際のボーナスに加え、フィットネスマシンやiPhoneの提供等、多くの業界では新入社員の気を引くために様々な特典やプレゼントを用意しています。

困窮するオーナー向けにスタッフ不足改善のオンライン・セミナーも開催され、例えば、人間に代わるAI等のテクノロジーの導入提案等の話もありますが、中小企業が果たしてそこまでの予算を捻出できるのか、課題も山積しています。

その中で現実的な話、給料アップは避けられないとしても出来る限りマルチな業務の出来るスタッフを雇用することで人件費節約を薦めています。

または教育費をオーナーが負担し、スキルアップが出来る機会を与えることで新入社員の気を引くという事が最善策とされているようです。

例えば、ホテル業界であれば語学習得なども良い例です。

ちなみにAmazon、Walmart、AT&Tなど400社を超える米国企業では、数年前からReskilling（リスキリング）と呼ばれる主にDX（デジタル・トランスフォーメーション）に対応する為に従業員教育に多額な投資をし、スキルアップを図るプロジェクトをスタートさせており、それを身に着けるため入社を希望する新入社員を惹きつけています。



スキルアップと言えば、カリフォルニア州には働きながらもスキルを身につける事ができる “Stater Brothers” という約 170 店舗を展開しているローカルなスーパーマーケットチェーンがあります。

空軍が使用していた 24 万坪の土地購入を行い”Stater Brothers University” を 2007 年に設立し、学べる機会を提供しながらスタッフを募っています。

Stater Brothers 社の方針は、現場で働くスタッフの能力向上にとどまらず、ローカルで生まれ育った人々が生涯教育や目標設定が出来る場所の 1 つとなるといった高い意識が根底にあります。



話題が少しそれますが、現在、意識の高さとマルチな活躍で米国が注目している日本人といえば、アナハイムエンジェルスの大谷翔平選手です。

新型コロナウイルスの発生源をめぐって反アジア的な発言が噴出した 2020 年から、近年ではアジア人全体に対するヘイトクライム（特定した人種に対する暴力や暴言を発するなどの差別）が起きていました。

ですが、最近日本人に対する印象が変わってきています。そのきっかけは、大谷投手自身の活躍と彼の謙虚で真摯な態度によるものだと言われています。

私の息子も米国企業で働いているのですが、先日部署のマネージャーに「うちには二人の息子に幼い頃からベースボールをさせているのだが、彼らは大谷選手を非常に尊敬している。」と突然話しかけられたそうです。

同様に、周りの人々も大谷選手と同じ日本人に対して良い印象抱いている雰囲気を感じるようで、とても嬉しいと言っておりました。

やはり大谷選手の凄さは、打っても、投げて完璧 という二刀流としてのマルチ性で、笑顔を絶やさないフレンドリーさとさりげないゴミ拾い等、彼の人としての素晴らしさが高く評価されています。

ライバル視される相手方の選手でさえ大谷選手を手放しで好きだという位です。

再開されたスポーツバーのテレビ画面で活躍する大谷選手に向けた歓声を耳にする時、私も心から誇らしく感じます。

コロナが終息し、日本の皆様が米国へ訪れる日が来ても大谷選手の活躍がある限り、堂々と胸をはって米国を楽しめる事でしょう。

